

啄木と自然主義・社会主義

——凡そ思想というものは、其思想所有者の性格、経験、教育、生理的特質及び境遇の總計で有る。(所謂今度の事)

橋 本 威

啄木の、初期の思想的傾向が、浪漫的色彩に富んでいた事は、大方の異論あるまい。その中心に坐っていたのが、彼自ら「哲學」とし、「信仰」としていた「一元二面論」である。これは、デカルト流儀の自己確認の上に、ニーチェ風の天才主義を導入し、更に、ワゲネル的「愛」に揚棄しようという、一種の人生論である。例えば、明治三十九年一月十八日付、小笠原謙吉宛書簡に、次の通りにある。

『我考ふ、故に我在り』てふデカルトの一提言は言葉深いかた。見よ、この世の事、物、すべてを疑ひつくして、然も猶遂に疑ふべからざるは、唯一つ、『我の存在』には候はずや。(中略)人間のあつめる信念といふもの、畢竟するに皆、この『我の存在』の自覺に伴さい來る當然の事實也。

(中略)この時に當りて、リヒヤード・ワゲネルの偉大なる思想こそ、小生の此の意識をして益々明瞭ならしむる唯一の力に候ひしか。(中略)彼は同じくシヨウベンハウエルより出で乍ら、トルストイと共に意志消滅の誤謬に陥らず、又ニーチェと共に意志擴張のみの極端に走らざりき。この相反したる二思想の間に、微妙なる一大発見は彼の天才によつて見出されたり。乃ち、意志擴張の愛の健闘的勇氣によつてのみ到達せらるべき神人握手の妙境也。

右の他には、明治三十五年十月十七日付細越毅夫宛書簡、明治三十九年九月二十八日付野村長一宛書簡、明治三十九年八月三日付伊東三一郎宛書簡『天地』(明38・6・7・7・12)、『秋風記 彌島梁川氏を弔ふ』(明40・9・22筆)などに、「一元二面論」が見られる。啄木は、「此兩面觀に立する予の哲學は、予が少くとも現在に於て、以て最高の思想とする所のものである。」(秋風記 彌島梁川氏を弔ふ)という様な言い方をしている。この人生論に、強い自信を懐いていたと言える。

啄木が、この「一元二面論」を自ら否定するのは、明治四十二年二月である。『卓上一枝』(明42・2)と明治四十一年二月八日付宮崎郁雨宛書簡に、その心情が吐露されている。例えば、次の如くである。

此立論は予が唯一の哲學なりき。此一家の哲學を立て、予は一切の懷疑霧散したりとせりき。然れども悲しい哉、予の哲學は予に教ふるに一事を利したり。(中略)予、此生死の大疑を解く能はずして、弊衣破履、徒らに雲水を追うて天下に放浪す。(中略)予は、予の半生を無用なる思索に費したるを悲しむ。(卓上一枝)

そこで、明治四十一年一月を、啄木の浪漫主義時代の終了の時期と見ることもできる。

尤も、明治三十九年三月から、それまでの実生活輕視の態度が弱まり、実

生活を見えようにならなく、「人生虚無」は、人間を自殺へ追い詰めるだけのものではなからう。啄木は生き続けなければならぬ。妻子の爲にも、生き続けなければならなかった。彼は「人生虚無」の思いに責められつつも、なお文学の權威を認め、精神の価値を肯定し、理想を求め、自信の回復に努め、戦いを呼び、新しい浪漫の到来を切望している。前掲宮崎郁雨宛書簡や「卓上一枝」に見られる一種の混乱は、啄木の心中に於ける「虚無」と理想との相剋を反映しているのである。

「一元二面論」が鑑樓の有様となり、もはや確固とした浪漫思想が彼の胸には描けない状態になっても、なお啄木は、生き続けねばならなかった。その爲に、啄木が辛うじて擱んだものは、八創作に全てを賭けるVという事であった。明治四十二年四月、啄木は必死の覚悟で、北海道より上京し、「菊池君」「病院の窓」「母」「天鷲絨」「二筋の血」などを、いわば武者羅に書き上げる。だが、確固たる思想なくして書かれた、啄木自身の言葉を借りれば、これら「盲動」の結果が、成功する筈もなかった。それは、既に根元を打ち倒された浪漫的支柱の残骸と、それを打ち倒した自然主義の弾痕とが同居しているという、奇怪な存在でしかなかった。

勿論、技術的には、自然主義の客観描写を多少とも吸収した結果、それらは、「雲は天才である」(明39・7起筆)に比較すると、かなり小説らしくはなっているものの、根本を貫く思想が見当たらない。例えば、「菊池君」は、「菊池君は漢文にアテられた男である。正直で気概があつて、爲に失敗をつづけてきた天下の浪士である。年まさに四十、盛岡生まれ、おそろしいばかりの鬚面、昔なら水滸傳中の人物、今なら馬賊といったやうな人物。(中略)快男子菊池、飲むことさながら長鯨の百川を吸ふが如し。」(明41・3・20日記)という浪漫的感興で捉えた人物を、「才にまかせてズン／＼書くのなら僕はチットモ困らぬが、努めて簡潔な文を書きた人間は、人間である限り、理想なしに生きられるものではない。恐

生活を見えようにならなく、「人生虚無」は、人間を自殺へ追い詰めるだけのものではなからう。啄木は生き続けなければならぬ。妻子の爲にも、生き続けなければならなかった。彼は「人生虚無」の思いに責められつつも、なお文学の權威を認め、精神の価値を肯定し、理想を求め、自信の回復に努め、戦いを呼び、新しい浪漫の到来を切望している。前掲宮崎郁雨宛書簡や「卓上一枝」に見られる一種の混乱は、啄木の心中に於ける「虚無」と理想との相剋を反映しているのである。

「一元二面論」が鑑樓の有様となり、もはや確固とした浪漫思想が彼の胸には描けない状態になっても、なお啄木は、生き続けねばならなかった。その爲に、啄木が辛うじて擱んだものは、八創作に全てを賭けるVという事であった。明治四十二年四月、啄木は必死の覚悟で、北海道より上京し、「菊池君」「病院の窓」「母」「天鷲絨」「二筋の血」などを、いわば武者羅に書き上げる。だが、確固たる思想なくして書かれた、啄木自身の言葉を借りれば、これら「盲動」の結果が、成功する筈もなかった。それは、既に根元を打ち倒された浪漫的支柱の残骸と、それを打ち倒した自然主義の弾痕とが同居しているという、奇怪な存在でしかなかった。

勿論、技術的には、自然主義の客観描写を多少とも吸収した結果、それらは、「雲は天才である」(明39・7起筆)に比較すると、かなり小説らしくはなっているものの、根本を貫く思想が見当たらない。例えば、「菊池君」は、「菊池君は漢文にアテられた男である。正直で気概があつて、爲に失敗をつづけてきた天下の浪士である。年まさに四十、盛岡生まれ、おそろしいばかりの鬚面、昔なら水滸傳中の人物、今なら馬賊といったやうな人物。(中略)快男子菊池、飲むことさながら長鯨の百川を吸ふが如し。」(明41・3・20日記)という浪漫的感興で捉えた人物を、「才にまかせてズン／＼書くのなら僕はチットモ困らぬが、努めて簡潔な文を書きた人間は、人間である限り、理想なしに生きられるものではない。恐

「一元二面論」が鑑樓の有様となり、もはや確固とした浪漫思想が彼の胸には描けない状態になっても、なお啄木は、生き続けねばならなかった。その爲に、啄木が辛うじて擱んだものは、八創作に全てを賭けるVという事であった。明治四十二年四月、啄木は必死の覚悟で、北海道より上京し、「菊池君」「病院の窓」「母」「天鷲絨」「二筋の血」などを、いわば武者羅に書き上げる。だが、確固たる思想なくして書かれた、啄木自身の言葉を借りれば、これら「盲動」の結果が、成功する筈もなかった。それは、既に根元を打ち倒された浪漫的支柱の残骸と、それを打ち倒した自然主義の弾痕とが同居しているという、奇怪な存在でしかなかった。

勿論、技術的には、自然主義の客観描写を多少とも吸収した結果、それらは、「雲は天才である」(明39・7起筆)に比較すると、かなり小説らしくはなっているものの、根本を貫く思想が見当たらない。例えば、「菊池君」は、「菊池君は漢文にアテられた男である。正直で気概があつて、爲に失敗をつづけてきた天下の浪士である。年まさに四十、盛岡生まれ、おそろしいばかりの鬚面、昔なら水滸傳中の人物、今なら馬賊といったやうな人物。(中略)快男子菊池、飲むことさながら長鯨の百川を吸ふが如し。」(明41・3・20日記)という浪漫的感興で捉えた人物を、「才にまかせてズン／＼書くのなら僕はチットモ困らぬが、努めて簡潔な文を書きた人間は、人間である限り、理想なしに生きられるものではない。恐

いと心がけて居る。それが（進る才を殺す事が）仲々辛いものだ。」（明41

・5・11、宮崎郁雨宛書簡）という執筆態度で書いた奇妙な作品である。

『病院の窓』にしても、「これは釧路新聞の佐藤といふ男（催眠術の先生）

をモデルにしたのにて、肉體の争ひ胸中に絶ゆる事なく、下り坂一方の生

活のために廉恥心なくなり、朝から晩まで不安である人間を描き候。」（明

41・6・8、宮崎郁雨宛書簡）とはいうものの、その「人間」とは、あく

までも変わった個人「佐藤」の範圍にとどまっています、かつ、啄木自身を

思わせる編集主任「竹山静雨」を、次の様に説明している。

打見には二十七八に見える老けた所があるけれど、實際は漸々二十

三だと云ふ事で、髯が一本も無く、烈しい氣象が眼に輝いて、少年ら

しい活氣の溢れた、何處か恠うナポレオンの肖像畫に肖通つた所のあ

る顔立で、愛相一つ云はぬけれど、口元に絶やさぬ微笑に誰でも人好

がする。一段二段の長い記事を字一つ消すでなく、スラスラと読みな

く綺麗な原稿を書くので、文選小僧が先づ一番先に竹山を讚めた。社

長が珍重して居るだけに恐ろしく筆の立つ男で、（後略）

いわば、いい氣な自己礼讚だと言えぬ事もない。

啄木が幼少時「神童」と噂された事は著名である。啄木自身の筆にも、

『一握の砂』の歌や『八十日間の記』、明治三十九年一月十八日付小笠原

謙吉宛書簡に、この事が見える。例えば、次の通りである。

長じては學才等輩に秀で、人に神童などと稱へられて（後略）（小

笠原謙吉宛書簡）

△神童神話△は彼の成長と共に崩れたに違いないが、かわりに△ナポレ

オンに似ている△と言われたらしい。次の通りにある。

○何處か似て居るとかで又ナポレオンとも呼ばれた。（林中書）

○自らはナポレオンに似たと思ふ眼のみ燃えたり沈んだりする今の我

（明39・3・10、日記）

ナポレオンは天才であり、英雄である。ナポレオンに似ていると言われ

た事が、「神童」にかわって、続けて啄木の自信・自尊・自負を育てて行

ったに違いない。

いい氣な自己礼讚は、△ナポレオン△の形で、啄木の小説に見られるも

のである。このつながりを、筆者は△ナポレオン系譜△とよぶ事にしてい

る。前掲『病院の窓』を再び加えると、次の通りである。

○音吐明々のナポレオンに、渾身の注意を向けた。（雲は天才である）

○或る上級の友に、立花の顔は何處かナポレオンの肖像に似て居るネ、

と言はれてから、不圖軍人志願の心を起して……………（葬列）

○何處か恠うナポレオンの肖像畫に肖通つた所のある顔立で……………

（病院の窓）

○渠の眼、（それを孝子は、寫眞版などで見たと奈勃翁の眼に肖たと思

つてゐた。）（足跡）

一体に、上京後しばらくの啄木は、小説作成に関して、矢鱈に自然主義

的言辭を書簡や日記に書き付けているのだが、『病院の窓』に見られる

ナポレオン系譜△の性格など、実作には、前述浪漫的支柱の殘骸が、な

お色鮮やかだとせねばなるまい。『菊池君』には「ナポレオン」の文字は

出て来ないが、登場人物「私」は次の通りに設定されて、△ナポレオン系

譜△に近い事を示している。

私が編輯の方針を改めてから、間もなく「日報」の評判が急によく

なつて来た。△恠うなると滑稽△もので、さらでだに私は編輯局で一番

年が若いのに、人一倍大事がられて居たのを、同僚に對して氣恥かし

い位社長や理事の態度が變つて来る。（菊池君）

創作的不成功——つまり辛うじて擱んだ生きる目的の喪失は、またもや

啄木を深刻な虚無の中に叩き込んだのであった。明治四十一年七月、第二回の大懐悩から僅か五カ月目に、啄木は再び「人生虚無」の悲痛な叫び声をあげている。明治四十一年七月七日付宮崎郁雨宛書簡、同日付岩崎正宛書簡、同年七月二十九日付宮崎郁雨宛書簡、同日記などに見られるのがそれである。例えば次の様にある。

蒼茫たる宇宙の間に僅かの時間を與へられて生きてゐるのが我ら人間だ。價值も何もあつたものでない。人生に定義がないから、眞とは何ぞ。美とは何ぞ。皆不可解だ。藝術にも定義なく、従つて價值なく、自己にも定義なく價值がない。考へると死ぬ外はない。虚無だ。(明41・7・29、宮崎郁雨宛書簡)

啄木は、美を、真理を、精神を、理想を、人間たる事を否定し、そして、今度は、文学にも懷疑を感じざるを得なかつたのである。この、再度目の精神的大動搖は、もはや取り繕^{すが}るべき創作もなく、まさしく啄木に自殺を迫るものであった。既に同年六月に、啄木は「ああ、死なうか、田舎に帰れようか、」(二十七日)、「死にたい。けれども自ら死なうとはしない。悲しいことだ。自分で自分を自由にしえないとは、」(二十九日)などと、日記に書いている。一時は、「一生のうち、最も大膽に、最も露骨に、最も深く、最も廣く、人生一切の悲喜哀樂のすべてを味は」う事を、「生きてゐる唯一つの理由」(明41・7・7付岩崎正宛書簡)にしようとする。これは、「僕にとつて、小説は僕自身の告白だ(廣い意に於て)そして人間の虚偽を剝いでしまふ爲の唯一の武器だ。現状を打破して新世界を作る爲の唯一の武器だ。」(同)という、創作を生きる目的に復活させようとする試みにつながるものだが、しかし、同年七月二十七日、啄木は「深い決心」——「俺は死ぬのだといふ弱々しい決心」(日記)をして、下宿をあとにしている。だが、啄木は、どうしても生きなければならな

った。「ああ盲動するより外にこの生を成すの路がない。」(明41・7・28)と、啄木は日記に記している。宮崎郁雨宛書簡(明41・7・29)にも「遂に遂に盲動あるのみだ、」と書いている。

けれど、遂に人間は「盲動」では生きられまい。啄木は、与謝野鉄幹門下の新進詩人達——北原白秋、吉井勇、平野万里、木下幸太郎等の浪漫精神に接している間に、またも徐々に「理想」を築き始める。この、一種の立ち直りには、三つの理由を設ける事ができよう。その第一は、言うまでもなく、彼等の感化を受けた事。第二は、「スバル」発刊の接衝を通じて、彼等との心理的葛藤に、啄木が優越した自信。第三は、明治四十一年十一月より、啄木の小説「鳥影」が東京毎日新聞に連載された事。これらの中で、啄木は、自然主義を弁証法的に克服する筈の、新しい浪漫的傾向を模索し始める。彼は、時には絶望に喘ぎ乍らも、「意力」の必要を痛感し(『百回通信』、明43・1・9付大島經男宛書簡、明42・2・21付日記など)、「積極的自然主義——新理想主義」を唱え(明42・4・10付日記)、「人生虚無」もまた一面觀に過ぎない事を発見し(『百回通信』)、自然主義の欠陥を述べ始める。いわば、△理想の再建であり、彼の言う「哲學」の復興である。今度は、単なる空想や所謂浪漫主義は排斥され、「自己の生活の改善、統一、徹底」(明43・1・9付大島經男宛書簡)や「自己を造る」(同)事が人生の目的として設置され、具体と生活と実行とが強調されて、「新しい個人主義」(同)、「新日本主義」(同)といった言葉もとび出す。こうした状態が、「予の思想に一大變革ありたり。」(明治四十四年當用日記 補遺欄「前年(四十三)中重要記事」)とある明治四十三年六月の、幸徳秋水事件発生まで続いているのである。確かに啄木は、この時期に、自然主義に懐疑^{しほ}言及してはいる。しかし、それらは、自然主義を否定した「まれざれに心に浮んだ感じと回想」、

『性急な思想』、明治四十二年四月十日付日記、明治四十三年一月九日付大島經男宛書簡の記事であり、新浪漫主義を待望している明治四十一年五月七日付吉野章三宛書簡の主張であり、自然主義に対する不満を述べている『一年間の回顧』、『硝子窓』、明治四十一年九月九日付藤田南洋・高田紅果宛書簡の記述であり、過去の功績として自然主義を認めた『食ふべき詩』の所説などであって、啄木を自然主義者とする力に欠ける。「現實暴露の悲哀」という言葉が振り廻されている事にしても、それが自然主義信奉を意味するのであれば、何故啄木はあれ程までに懊悩しなければならなかったであろうか。啄木の大懊悩は、それまでの自己の浪漫的思想で以て自然主義と対決し、自己が敗れた事を意味する。敗れたとは、従来の思想をあらゆる破壊され、無思想——虚無の状態に陥ったという事である。有名なローマ字日記の執筆態度にしても、これを自然主義に直接結び付ける事は困難に近い。無論、ローマ字日記で知られる当時の啄木の生活が虚無的であった事は、素直に理解される。だが、日記とは、元來が告白のものであり、赤裸々なものである。赤裸々な自己を、結局は日記に示し得なかつた事が、かえって、啄木と当時の自然主義との距離を物語っている。

この時期にあつても、啄木が何とかして取り繕うとしたものは、△將來への期待▽であり、△自負心▽であり、△冒險▽であり、△現状打破▽であつた。△理想▽を回復するべき基盤としての、啄木自身の浪漫的性格であつたのだ。

實際、この時期の啄木は、はかない期待を懷いては破れている。例えば、時代的な期待についていえば、次の如くである。

今は恰度自然主義が第二期に移る所だ。乃ち破壊時代が過ぎて、これから自然主義を生んだ時代の新運動が、建設的の時代に入る。(中

略)そして、第二期の自然主義の時代の半分以上過ぎた時、初めてホントの新しいロマンチズムが胚胎するに違ひない。

その二つが握手して、茲に初めて、眞の深い大きい意味に於ける象徴藝術が出来あがる。(明41・5・7付吉野章三宛書簡)

右の他には、明治四十一年七月七日付岩崎正宛書簡、同年七月(日付不明)小田島孤舟宛書簡、明治四十二年四月六日付日記などにも、時代的期待が甘く述べられている。

自負心も亦、散見される。自負心は、往々にして、現実生活の中の甘い見通しを生む事になる。そもそも△創作に全てを賭ける▽という単身上京からして、所詮は甘い見通しだったのである。それも簡単につぶれるとすれば、時流迎合を考えなくてはなるまい。例えば、次のような具合の記述が見られる事になる。

眞の作家は、人の心理を知悉すると共に、時代の心理を透視せざるべからず(明41・9・9付藤田南洋・高田紅果宛書簡、傍点原文ノママ)

右の他に、『一年間の回顧』、明治四十一年六月十七日付宮崎郁雨宛書簡、同日付日記、明治四十二年一月十八日付日記、同年四月十日付日記などに、時流迎合的心情が吐露されている。

時流迎合もうまく行かなければ、明治四十二年四月十二日付日記、同年五月三十一日付日記などに見られる如く、逃避を考える事となる。例えば次の通りである。

實際、地方の新聞へ行くのが一番いいやうに思はれた。(明42・5・31、日記)

逃避も現実的には不可能だったとすれば、せめて過去の追憶にでも耽けて、現実の苦痛を少しでも柔げたくなるであろう。過去は美しい。過去

の日々の苦痛も、時間の霧にかすんで、美しく見えるものだ。現在よりは若かりし日々の、夢多かりし日々である。とりわけ、八故郷思慕Vの形で行なわれた彼の幼少年時代の追憶は、嘗ての八神重性V——自己の天性の確認となつて、外的条件の厳しさに崩れようとする啄木の精神を支える最有力の手段となつたに違いない。生活の厳しい日が、啄木の追憶に耽けた日なのである。「一握の砂」には、「煙」「忘れがたき人々」の歌で代表されるのだが、追憶の歌が多く見られる。筆者の勘定によれば、五五一首中、一一五首もの故郷思慕の歌が算えられる。啄木が、あれ程にも詠わざるを得なかつた理由の一半が、ここに納得される。書簡や日記では、明治四十一年五月二十九日付大島經男宛書簡、同年六月八日付宮崎郁雨宛書簡、同年八月二十二日付宮崎竹四郎宛書簡、明治四十二年三月三日付宮崎郁雨宛書簡、明治四十三年一月九日付大島經男宛書簡、明治四十一年七月十三日付日記、同年七月二十二日付日記、同年十月一日付日記、明治四十二年三月十二日付日記、同年四月九日付日記、同年四月十八日付日記、同年五月八日付日記などを、この時期の、啄木が追憶に耽けた日々を伝えている。

結局のところ、啄木は、この時期に、理想を回復して新しい思想体系を樹立する事はできなかった。彼は、「實行的、具體的」(明43・1・9付大島經男宛書簡)という事を強調してはいるが、この時期の思想的断片には、何らの実行的裏付けも具体性もなかつたのである。「自己の生活の改善、統一、徹底」云々然り。「自己を造るといふ」事然り。「新日本主義」然り。啄木の具体的な日々の中で、これらがどれだけの価値と力とを有していたであろうか。暫らくの間、啄木を自己陶醉に陥らせただけのものではないか。これら、日々の現実生活の中では何の力をも有たぬ八理想の立札Vは、そのままでは、早晚、「虚無」によって空中分解し、

啄木は、三度目の、虚無の大苦惱に陥り、今度こそ確実に、自殺に追い詰められる筈であった。

こういう時に、明治四十三年六月、幸徳秋水事件が発生し、無政府主義が、啄木の胸中に、レットルだけであつた八理想Vの内容を充たすものとしてとび込み、「虚無」に打ち倒される筈の、内容空虚な啄木の八理想Vを、そして恐らくは啄木の生存そのものをも、一応救つたのである。明治四十四年一月九日には、彼は瀬川深宛書簡で、一種の社会主義者宣言を行なうに至る。

明治四十一年二月より明治四十三年六月までの時期は、啄木の自然主義時代ではなく、啄木の浪漫主義時代に続く、啄木の八虚無と理想との格闘時代Vとして把握しなければならぬと思われる。

さて、啄木は、八虚無と理想との格闘時代Vの苦難を切り抜け、社会主義者として、真に再生し得たのであろうか。

啄木と、今日の意味での「社会主義」との関係は、明治三十九年三月二十日に始まる。この日の日記に、社会主義に「同調する事は出来ぬ。」とあって、兎も角も、社会主義が啄木の脳裡に登場している。

次いで、明治四十年九月、啄木は札幌で社会主義者小国露堂と相知つた。同年九月二十日付岩崎正宛書簡で、啄木は小国露堂の「氣骨」を快とし、彼を「我黨の士」とはよんだが、主義そのものには同調していない。更に、明治四十一年一月四日、啄木は小樽で社会主義演説会に出かけている。だが、この時も亦、「断々乎として説くところ」(明41・1・4付日記)に快を感じてはいるものの、主義そのものに対しては、「何も新しいことはない」(同)と述べている。

明治四十三年五月の「我等の一團と彼」になると、次の通りの部分があ

って、社会主義は、漸く啄木の関心をひき始めたものようである。

『僕は社会主義者では無い。』と高橋は言ひ溢るやうに言ひ出した。

「——然し社会主義者で無いといふのは、必ずしも社会主義者に反対だといふことでは無い。誰でも仔細に調べて見ると、多少は、社会主義的分子をもつているものだ。彼のビスマルクでさへ社会主義の要求の幾分を内政の方面では採用してゐるからね。——と言ふのは、社会主義のセオリーがそれだけ普遍的な真理を含んでゐるといふことよりも、寧ろ、社会的動物たる人間が何れだけ其の共同生活に由つて下らない心配をせねばならんかといふことを證據立ててゐるんだ。」

ここに言う社会主義の概念はかなり曖昧であるし、また、小説の登場人物の事でもあるし、啄木と社会主義との本格的な出合は、矢張り、前述の如く、明治四十三年六月の、幸徳秋水事件によるとしなければならぬ。そして、明治四十四年一月九日付瀬川深宛書簡でなされた社会主義者宣言というものは、次の言葉である。

僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない、

自称は兎も角として、社会主義者石川啄木Vを立証するものは、恐らくは次の三点であろうと思ふ。乃ち、

(1) 幸徳秋水事件の真相を見抜き、世人の覚醒を企てた事。

(2) 社会主義を研究し、社会主義的主張を企てた事。

(3) 社会主義者として日常生活を送つた事。

右のうち、(1)に該当する人物として、我々は、『沈黙の塔』『食堂』の森鷗外、『和泉屋染物店』の木下李太郎、『散柳窓夕映』の永井荷風、幸徳秋水等の弁護人の一人でもあった『計畫』『逆徒』の平出修、その他に、正宗白鳥、佐藤春夫、与謝野鉄幹等の名前を挙げる事ができよう。言

うまでもなく、彼等は何れも社会主義者ではない。啄木は何をしたのであるか。まず、日記に悲憤をあらわに書き記してはいる(明44・1)。しかし、日記とは、筆者自らだけのものだ。現在公開されているのは、啄木にとつては偶然の事ではかない。書簡にも、この事件の事を書いてはいる。が、これも私的なものだ。あの『所謂今度の事』というのを書き記した。これは公表するつもりであつたのを、一人の新聞社役員の世間的良識によって阻まれた。この間の事情は、斎藤三郎氏によって明らかにされている(『所謂今度の事』についての「考察」——「文学」昭32・10)。結果的には、彼は鷗外ほどにも、何も為していない。例の冒険心が、新聞人の常識に拒まれただけだと、考えられなくもない。事件の真相を見抜いたというの、「スバル」を通じて交渉の深かった平出修から啓発されたものである。啄木はこの事件に関して、地道で理性的な啓蒙活動として、結局は何も行なっていない事になる。

(2) について、啄木が社会主義を研究した事は認められる。岩城之徳氏の調査(人物叢書『石川啄木』)によると、当時の啄木が愛読したと思われる社会主義関係書誌類は、次の十二種となつてゐる。

幸徳秋水『社会主義神髓』『平民主義』『廿世紀之怪物帝國主義』

片山潜・西川光二郎『日本の労働運動』

久津見蔵村『無政府主義』

田添鐵二『經濟進化論』

河上肇『社会主義評論』

高橋五郎『社会主義活辯』

堺利彦・森近運平『社会主義綱要』

北輝次郎『純正社会主義の經濟學』

『社会主義研究』『大阪平民新聞』

日記にも、丸谷に社会主義について、「どうだ、それでは一つ君の所信を確かめるために、根本的な研究をしては」と言われたのに対し、「僕は資本なしに出来ることなら今でもやつてゐる。」と答えたのである(明44・11・12)。

が、社会主義研究は、そのままでは社会主義者である事の証明にはならぬ。

社会主義的主張を企てたという点に関して挙げ得る啄木の作品には、『小説「墓場」に現れたる著者木下氏の思想と平民社一派の消息』(明43後半)、『INTO'S NOESES』(明44・1末頃?)、『トルストイ翁の日露戦争論に就て』(明44・5)などがある。何れも発表されたものではないが、発表されなかった事には、次の様な事情があったと言われている。

僕には年老つた両親があり、妻子がある。何の顧慮もなく僕が僕の所信に従ふといふ事は、それらの人々に取つては直ぐに悲惨な飢餓の襲來を意味してゐた。(平信)

右の如き事情を「顧慮」し乍ら、なおかつ啄木の一家に「悲惨な飢餓」が襲來した事は解せない現象であるが、ともあれ、明治四十三年後半以後の、啄木の評論類には、他にも、社会主義的香りが見出せない事もない。尤も、加藤佛三氏は、「文庫」(明43・10)に発表され「一握の砂」に採られなかった次の歌を、早くも社会主義的であるとしている(新日本新書『石川啄木』)。

つね日頃好みて言ひし革命の語をつつしみて秋に入れりけり
今思へばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり

秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でていく
時代閉塞の現状を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな
地圖の上朝鮮國にくるぐると墨をぬりつつ秋風を聴く

明治四十三年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも
言うまでもなく、社会主義文学を認定する材は、社会科学用語ではなく、そこに表われている表現態度、内容、心情なのである。

加藤佛三氏は、前掲書に於て、啄木がこれらの歌を「一握の砂」に採らなかったのは、「検閲を考慮せざるを得なかつたから」であり、従つて、「一握の砂」は社会主義的啄木を正しく反映していないと言ふのだが、「一握の砂」には、次の通りの作もある。

- 平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共座を主義とせりけり
- 赤紙の表紙手擦れし
國禁の
書を行李の底にさがす日

○賣ることを差し止められし
本の著者に
路にて會へる秋の朝かな

加藤氏は「一握の砂」に採らなかつた点を強調しているが、啄木が「一握の砂」を編むにあたって捨てた歌は、岩城之徳氏の調査(前掲書)によると、次の如き多数に達している。

	全歌数	「一握の砂」探録数	「一握の砂」不採録数
明治四十一年歌稿ノート	六五一	五四	五九七
明治四十二年作歌手帳	五四	一〇	四四
明治四十三年歌稿ノート	一二七	八七	四〇

これら多くの歌の不採録理由と、前掲六首の不採録理由との相違を明確にしなければ、有力な論とはなり得ないと思う。

社会主義的だとされる「呼子と口笛」にしても、社会主義的断片は確かに豊富であるが、簡単には社会主義を抽出し得ない。川並秀雄氏所蔵の原形から、「断片」をぬき出すと、次の通りである。

革命の思想・壮快なる雷鳴・新しき世界・五十年前の露西亞の青年
「V NAROD!」・握りしめたる拳・民衆の求むるもの・新しきもの・勇氣・テロリスト・奪はれたる言葉・おこなひ・敵・新しき社會・「權力」・同志・煽動家・怒り・會合・味方・思想・勞働者・機械職工・彼の腕・鐵・五月一日・唯物論者・起つ・この國にて禁ぜられたるもの・マルクスの「資本論」……等。

この際は、右の如き社会主義的用語に對する作者の姿勢を問題にしなければならぬのである。

乃ち、「革命の思想はひらめけども——」である。「かの壯快なる雷鳴は遂に聞え来らず。」である。「されど、それは常に一瞬にして消え去るなり、」である。「されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、／「V NAROD!」と叫び出づる者なし。」である。「我は知るテロリストの／かなしき心を——」である。

「しかして、今やその眼の再び開くことなし。」である。「同志の中の誰彼の心弱きを憎みつつ、」である。「それきり来なくなりし——」である。

確かに、この詩では、社会主義が一応は理想的なものとして据えられてはいる。だが、この詩の正面に置かれてはいるのは、それが、現実に対して如何に無力で、如何に空しいものであるかという、絶望的な心情なのではなからうか。力弱い詠嘆なのではないだろうか。

最も問題なのは、(3)である。文学者である前に、一人の人間として、一人の生活者として、一人の人間として、啄木は社会主義者であったらうか。一人の人間としてその「思想」を問題にする時、ところが最も肝要な所であらう。

啄木は、「現実の社會組織、經濟組織、家族制度……それらをその儘にして自分で自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、實驗の結果、遂ひに失敗に終らざるを得ませんでした。」(明44・2・6付大島經男宛書簡)と言っているが、「實驗」として、家族を犠牲にして文字に執着した他の、何をなしたというのであらう。「平民の中へ行きたい。」(明44・1・11付日記)とも啄木は言った。「人民の中に」(明44・2・14付小田島孤舟宛書簡)とも言った。だが、逃避を夢想する心情の他に、この言葉は、何の具体的な裏付けをも有っていない。逆に、人間啄木が、社会主義と如何に縁遠い存在であったかを、多くの諸伝記が伝えている。例えば、啄木が、妻の実家堀合家と義絶する際にとった妻への態度は、明治四十四年六月の三、四、五、六日の日記に示されている様に、明治日本の、標準的封建家庭の戸主のもの以外の、何ものでもなからう。これは、ほんの一例でしかない。そもそも啄木の生涯そのものからして、妻節子の犠牲の上に成立していたと言っても、決して過言ではあるまい。

勿論、どのような実生活の中から生まれようと、社会主義的なものは、社会主義的なものではある。しかし、筆者は、例えば、啄木に社会主義への目を開かせたと言われる幸徳秋水の、伝えられている厳しい日常生活を想起してしまうのである。幸徳秋水を社会主義者とよぶのは、恐らくよいであらう。啄木が社会主義を口にしたと言うのもよい。だが、啄木の実生活の中には、人間啄木を社会主義者だとするものは、皆無に近い。

社会主義は、啄木の虚無と理想との格闘時代にあって、理想の立札

——内容空虚な理想の内容を形成するものとして、啄木の胸中にとび込んだものではあったが、実践という形であらわれる人眞の理想Vではなかったのである。啄木は『所謂今度の事』に於て、「思想」を次の通りに定義している。

凡そ思想といふものは、其思想所有者の性格、経験、教育、生理的特質及び境遇の總計で有る。

この意味に於ても、社会主義は啄木の「思想」になり得ていない。浪漫的傾向こそが、啄木の基底を成す性格だったと考えられるからである。

例えば、明治四十一年二月より明治四十三年六月までの、啄木の八虚無と理想との格闘時代Vにさえ根強く見られた、前述の逃避的傾向は、明治四十三年六月以後にも、矢張り根強く見られる。次の通りである。

○「僕は何よりも金がほしい。そしてその金を持つて隠遁したい。」
さう僕は言つた。(明44・5・1付日記)

○それから岩手縣にかへつて、「農民の友」といふ週刊新聞を起こすことを想像した。(明44・5・7付日記)

とりわけ、過去への逃避——追憶は、現実生活が苦しかっただけに、度度をなされている。次の如き具合である。

軍人志願だつた僕、發火演習に小隊長になるのが何より楽しみだつた僕、繪葉書を見てみると、その當時の僕がさながら自分の弟か何ぞのやうになつかしく僕の眼に浮んだ。少くともその日一日は、しつくりと身に合つた軍服を着て佩剣を心地よく鳴らして歩く君を平和論者たる僕が心の底で羨んでゐた。(明44・8・26付宮崎都雨宛書簡)

右の他にも、明治四十三年十月十日付岡山儀七宛書簡、明治四十四年一月九日付瀬川深宛書簡、同年一月十四日付宮崎都雨宛書簡、明治四十四年一月二十一日付日記、同年四月十三日付日記、同年四月十九日付日記、同

年五月二日付日記などが、明治四十三年六月以後の、啄木の追憶の日々を伝えている。

社会主義は、体系を成していたという点で、一応暫しの間、啄木の希求する「理想」の内容を埋めはしたのだったが、それは、あくまでも、「主義」——一定の、出来上がりいようざうの所謂思想——でしかなく、遂に、啄木の八眞の思想Vの母体としての役目を果たさなかつたのである。啄木の実生活が社会主義に沿つて行なわれなかつた所以である。

『呼子と口笛』の草稿は、明治四十四年六月二十七日に成つたものであるが、これを機に、啄木の創作活動は、極度の衰えを見せている。同年九月以後は、短歌さえ殆んど詠んでいない。同年七月頃の出来事として、金田一京助氏が、嘗て、所謂啄木晩年の思想的動搖Vを、次の通りに報告した事があつた。

この頃であつたらうか、も少し前であらうか、杖につかまつて休み休み、弓町から森川町まで歩いて金田一氏を訪ね、今自分が思想上の一轉機にあること並にアナキズムの重大な誤を發見したといふことを物語つて態々安心してもらひに来たのだと云つた。そして「自分の今到達した思想の傾向については、自分ながらまだ適當な名を知らない。強ひて云へば——こんな反對な二名辭を結附けるのが可笑しいけれど、外に自分は今云へないから假にいふならばと云つて社會主義的帝國主義といふ表現を用ひ、そして病床に危坐して火を吐くやうに現代の社會組織を呪詛した口から、涙ぐましく一切の現實を此儘肯定しようとする血の出る様な言葉が響いた。(改造社版「石川啄木全集」第五卷、金田一京助編「石川啄木年譜」明治四十四年七月欄)

右は、後に、金田一氏自身によつて、否定、撤回されたものではあるが、右の時期が、啄木の創作力の、急激な衰えを示している時期に、ほぼ一致

している点に注目したい。筆者はここに、啄木の、三度目の「虚無の大苦悩」を感じるのである。

最初の「虚無の大苦悩」は、前述の如く、明治四十一年二月、自然主義によって齎もたらされたのであった。それは、啄木の、それまでの浪漫的思想を大きく動揺させた。啄木は、創作という「盲動」に、辛うじてしがみついたのであった。二度目の「虚無の大苦悩」は、創作の失敗によって、明治四十一年七月に起こった。危く啄木は、自殺するところであった。社会主義が、啄木にとって、△真の思想▽にまでなり得なかった以上、「社会主義」という名の、結局は△理想の立札▽を超えなかったものは、所詮現実の強風によって、打ち倒される運命にあったのである。

三度目の大苦悩に陥った啄木は、それでも自殺という形を拵もばなかった。それをさせなかったのは、現実的には、彼の妻の実家、堀合家方の力であったろう。自殺こそしなかったが、啄木は以後の日々を、生きる屍しなとなつて、病床で送ったのである。啄木の精神の側からすれば、自殺する気力すら失われていたと言ふべきであろうか。だが、啄木が、聽きて訪れた病死を迎えなかったとすれば、矢張り、自殺していたのではなからうか。

△虚無と理想との格闘▽は、結局「虚無」が勝利を以て、啄木の短い生涯を彩つたのである。社会主義は、啄木を救い得なかった。啄木の病死は、実質的には、啄木の自殺だとしてよいと思う。

(完)

△註▽ 本小論の前半は、昭和四十四年度日本近代文学会秋季大会で口頭発表した「啄木の思想変遷——おもに自然主義との関係——」の後半に基づく。